会　員　通　信

日本のカキ養殖が世界的産業となる基礎づくりを果たした民間人、宮城新昌氏一族を顕彰する記念碑

關　哲夫

明治から昭和にかけて活躍した沖縄県生まれの民間人、宮城新昌氏が果たしたカキ養殖技術への貢献によって、その後、日本が養殖カキの世界の主要な生産国となったことをご存知だろうか。

平成26年8月に当協会の原武史理事長が沖縄県への出張に際して、同県大宜味村に立ち寄った際、塩屋湾に面して建立された宮城新昌氏を頌徳する記念碑を訪れる機会を得た。頌徳の碑に隣接して、新しい記念碑が建立されており、宮城県石巻市の荻浜にも同氏一族を顕彰する記念碑があったが、東日本大震災で破損したため、平成25年10月に再建されたことが記されていた。このため、宮城県に居住し、カキ養殖との関わりを持っていた小生に由来のとりまとめが託された。私は、平成27年8月に、顕彰碑が再建された宮城県漁業協同組合荻浜支所の運営委員長、伏見眞司氏を訪ねて経緯を聞き取り、資料を基に宮城新昌氏一族顕彰についてのとりまとめを行った。また、末尾に宮城新昌氏の経歴を整理して示した。

頌徳碑（大宜味村）と顕彰碑（石巻市荻浜）では、宮城新昌氏の二つの業績が特筆されている。第1は垂下養殖法の開発、第2は種苗の抑制技術開発である。これらの技術は、大正2年にカナダから帰国して、水産講習所の製造科教授伊谷以知二郎氏に師事し、神奈川県金沢養蛎場で指導を受け、水産養殖技術の修業時代の大正8年から13年にかけて開発されている。この時代の水産講習所では、妹尾秀美、堀重蔵両研究者と共同でカキ種苗を米国向けに輸出するための技術開発が行われており、垂下養殖法開発に関する研究上の記録としては、両研究者の主たる業績とされている[2、3]。しかし、山本[1]が述べているように、養殖技術としての垂下養殖法は、宮城新昌氏の考案が基礎となっていたと考えられる。一貫して民間の技術者であった宮城新昌氏は、米国とカナダにおけるカキ養殖会社での実体験を持っており、水産講習所における輸出向け種ガキ生産技術の開発に取り組む妹尾秀美、堀重蔵両研究陣を現場技術から支えたと考えられる。記録に残る開発年度は大正13年となっているが、試験を繰り返して完成する技術開発であるから、水産講習所が輸出向けのカキ養殖試験を開始した大正6年以降に工夫・考案が重ねられたのであろう。乾[4]によれば、水産講習所の妹尾

秀美・堀重蔵両氏が開発し、宮城新昌氏は垂下式カキ養殖を事業化したとされている。また、長期間にわたる輸送に耐える種ガキを生産するヒントは、当時多くの民間企業も行っていた米国への輸出を通して得ている[1、3)]。これにより、大正8年に石巻市渡波の阿部善治氏とともに宮城県の万石浦で試験研究を行い[4)]、長途の輸送に耐えるカキ種苗育成技術として「床上げ抑制方法」が考案されている[1、3、4、5)]。同じ年にカキ殻を付着器とする垂下式採苗方式を阿部善治氏とともに考案している[4、5)]ので、この時期は精力的に養殖試験を行っていたことが認められる。宮城新昌氏は、大正14年に広島県広島市の草津漁業組合を訪れ、広島湾がカキの垂下式養殖に適していることを進言し、これを契機として広島県水産試験場で養殖試験が開始されている[1)]。垂下式養蛎法技術は、「牡蛎育養器」として自ら特許を取得したが、日本最大のカキ養殖産地である広島にも普及に努めるなど、独占せずに各地へ普及する努力がなされている[1)]。

垂下養殖技術は、当初の普及に時間を要し、第2次世界大戦に阻まれたが、昭和28年に広島県水産試験場が竹製かき筏を開発し、養殖漁場が広島湾沖合に拡大する段階以後急速に展開した[6、7)]。まさに、宮城新昌氏らが尽力した功績によって現在のような旬のカキを多くの消費者が楽しめる時代を迎えることが出来たといえる。床上げ抑制した種ガキは、3月頃に米国向け輸送船甲板積みで適宜海水散布によって大量の輸出が可能となり[3)]、米国向けの輸出が順調に推移した。宮城産種ガキは、第2次世界大戦の間（昭和16年～昭和20年）を除く大正12年から昭和53年に終焉するまで米国に輸出されている[5)]。

大正14年に宮城県石巻市荻浜村長と荻浜漁業協同組合が宮城新昌氏に養殖指導を懇請し、渡波漁業協同組合の協力によって万石浦に試験筏が設置され、2年後の昭和2年には大規模養殖が開始されている[3、4)]。その後、宮城新昌氏は「国際養蛎株式会社」（本社東京、作業場宮城県万石浦）を創立し、石巻市荻浜でもカキ養殖と種ガキ採苗を行っている。荻浜が選ばれたのは、湾口の島によって静穏な入り江をなす地形により、日本郵船の横浜・函館航路の中間寄港拠点として栄えていたためであったとのことである（伏見氏より聞き取り）。荻浜には国際養蛎株式会社の試験施設と宮城新昌氏の居住宅も設けられ、ゆかりの地となったことにより、荻浜に宮城一族の顕彰碑が建立された（伏見氏より聞き取り）。

写真1　顕彰碑を除幕した伏見委員長（左端）と岸さん（宮城新昌氏次女、左から4人目）、沖縄県大宜味村の島袋村長（右から3人目）

写真2　2つに折れた原顕彰碑

写真3　再建された宮城一族の碑（左）と同顕彰碑

写真4　沖縄県大宜味村塩屋湾に
建立された頌徳碑

宮城県石巻市荻浜の顕彰碑は、平成23年3月11日の東日本大震災による津波により割れて流されたが、地元有志が再建委員会を設立し、宮城新昌氏の出身地沖縄県大宜味村関係者の支援を受けて、平成25年10月13日に再建碑の除幕式を迎えている（写真1－4）。

宮城新昌氏年譜

（山本ちひろ、水産技術者宮城新昌と故郷沖縄の「振興」「復興」より抜粋・補填）

1884　沖縄県大宜味村根路銘で出生
1902　国頭郡各間切島立農学校一期生入学
1905　同校卒業
1906　渡米（ワシントン州シアトル）
1908　オリンピアオイスター会社入社
1911　カナダバンクーバーでローヤル漁業会社設立
1913　帰国
　　水産講習所製造科教授伊谷以知二郎に師事、水産講習所金沢養蛎場にて指導を受ける
1916　伊谷教授が組織する北洋水産株式会社の取締役として樺太へ渡航
1924　垂下式養殖法開発（妹尾秀美、堀重蔵と協力）
1925　宮城の進言により、広島県水産試験場で垂下式養蛎の試験開始、また、宮城県石巻市荻浜の村長等の懇請により、万石浦に試験筏を設置
1927　石巻市万石浦で大規模牡蛎養殖を実施
1930　沖縄県水産試験場養殖部の垂下式養蛎試験に種ガキを提供
1931　国際養蛎株式会社を創立し、社長就任。荻浜湾で牡蛎養殖と種ガキ採苗を開始
1932　垂下式養殖技術「牡蛎育養器」特許取得
1939　糧友会の丸本彰造が設立した興亜食糧研究所常任理事に就任
1942　沖縄資源化学研究所設立
1944　沖縄資源化学研究所が空襲により焼失
1949　沖縄経済復興研究会が組織され会長に就任
1967　逝去（享年83歳）

参考文献

1）山本ちひろ（2015）：水産技術者宮城新昌と故郷沖縄の「振興」「復興」。法政大学沖縄文化研究所。http://hdl.handle.net/10114/9944
2）菅野尚(1971)：カキ養殖の技術。浅海完全養殖(今井丈夫監修、恒星社厚生閣)
3）小金澤昭光（1984）：松島ガキの今昔。東北水研ニュースNo.26（水産庁東北区水産研究所）
4）乾政秀（2013）：日本のカキ養殖・百科。水産振興、第544号（第47巻4号）
5）宮城県の伝統的漁具漁法Ⅶ　養殖編（かき）（1994）：宮城県
6）赤繁悟（2005）：水産と海洋。No.2、広島県水産海洋技術センター
7）木村知博・兼保忠之（2003）：広島かきの養殖－主として昭和の発展の問題－。広島かき生産者協同組合